馬第伯「封禅儀記」訳注

はじめに

ここでとりあげる「封禅儀記」は、後漢の光武帝が、建武三十二（西暦五十六）年二月に挙行した封禅の儀式の随行記である。「続漢書・祭祀志」劉昭注に「應邵漢官馬第伯封禅儀記曰」とあるが、「水経注」では「馬第伯書曰」に続けて「應邵漢官儀曰」とあることから、両者は一応別物であり、「馬第伯封禅儀記」が独立した文献であったことは間違いないだろう。ただし、原書は早くに散逸し、「隋書・経籍志」にもその名は見えない。応邵の「漢官儀」に引用されたものが、更に他書に引用されて残っているに過ぎない。

撰者の馬第伯については、何も分からない。

現存する「封禅儀記」の本文は、建武三十二年正月二十八日の、光武帝洛陽出御から、二月二十二日の升封を経て、同月二十五日の梁陰における禅祭までを記録する。その内容は、執り行われた儀式を記録する「儀注・起居中的部分」と、馬第伯自身の登攀体験を記す「体験記的部分」からなる。つまり、一応は、封禅の儀式の記録という客観的な「儀注・起居中」なのだが、その中に、馬第伯の体験や感動が語られる主観的な記載が紛れ込んでいるものとなっている。この点も確認しながら訳注を行う。

「封禅儀記」訳注

凡例

○「封禅儀記」を収録する文献は、次のものがある。

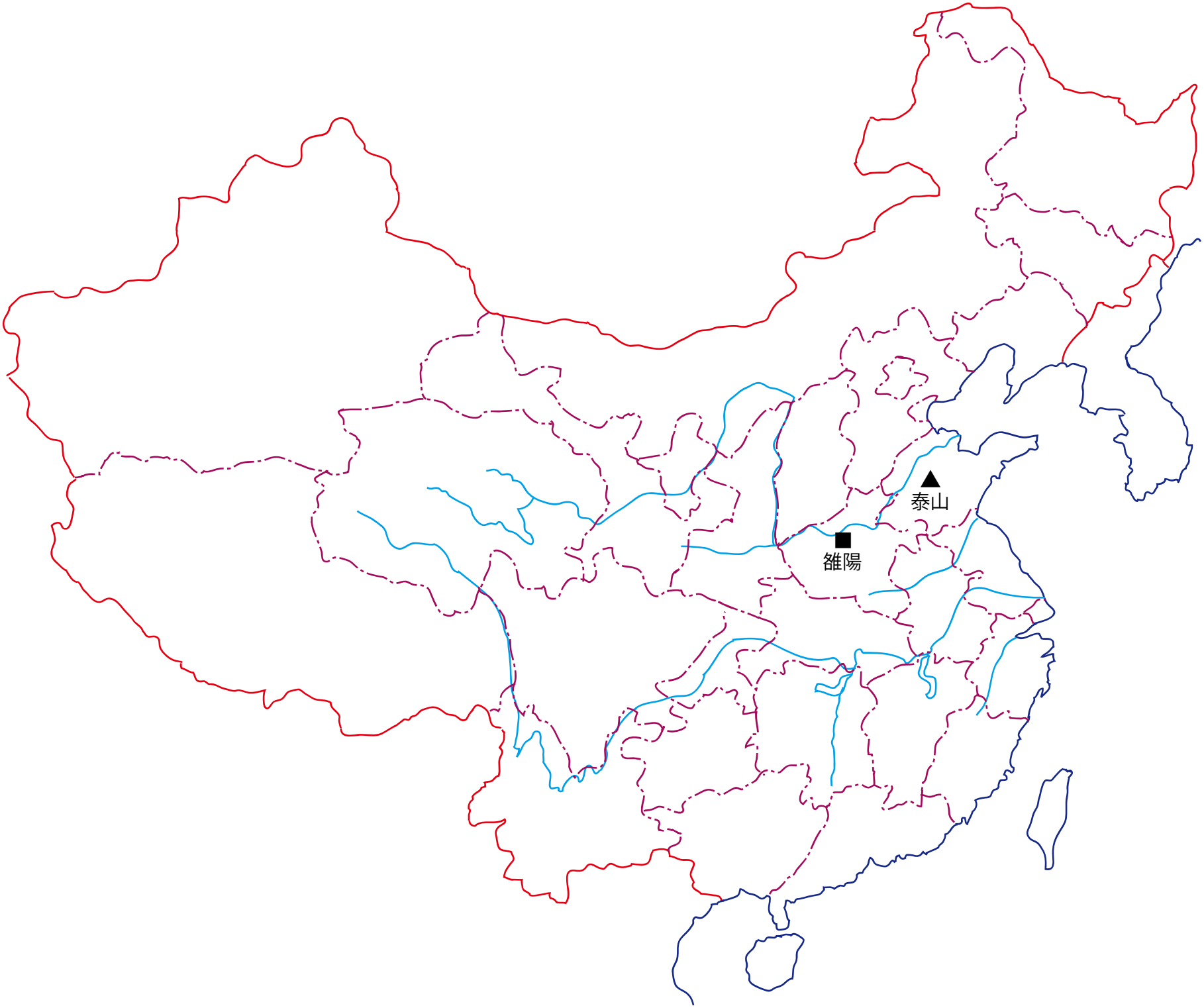
・「続漢書・祭祀志」劉昭注……12条
・「水経注・汶水注」……1条
・「北堂書鈔」……15条
・「芸文類従」……6条
・「初学記」……2条
・「白孔六帖」……1条
・「通典」……2条
・「太平御覧」……13条
・「錦繍万花谷」……1条

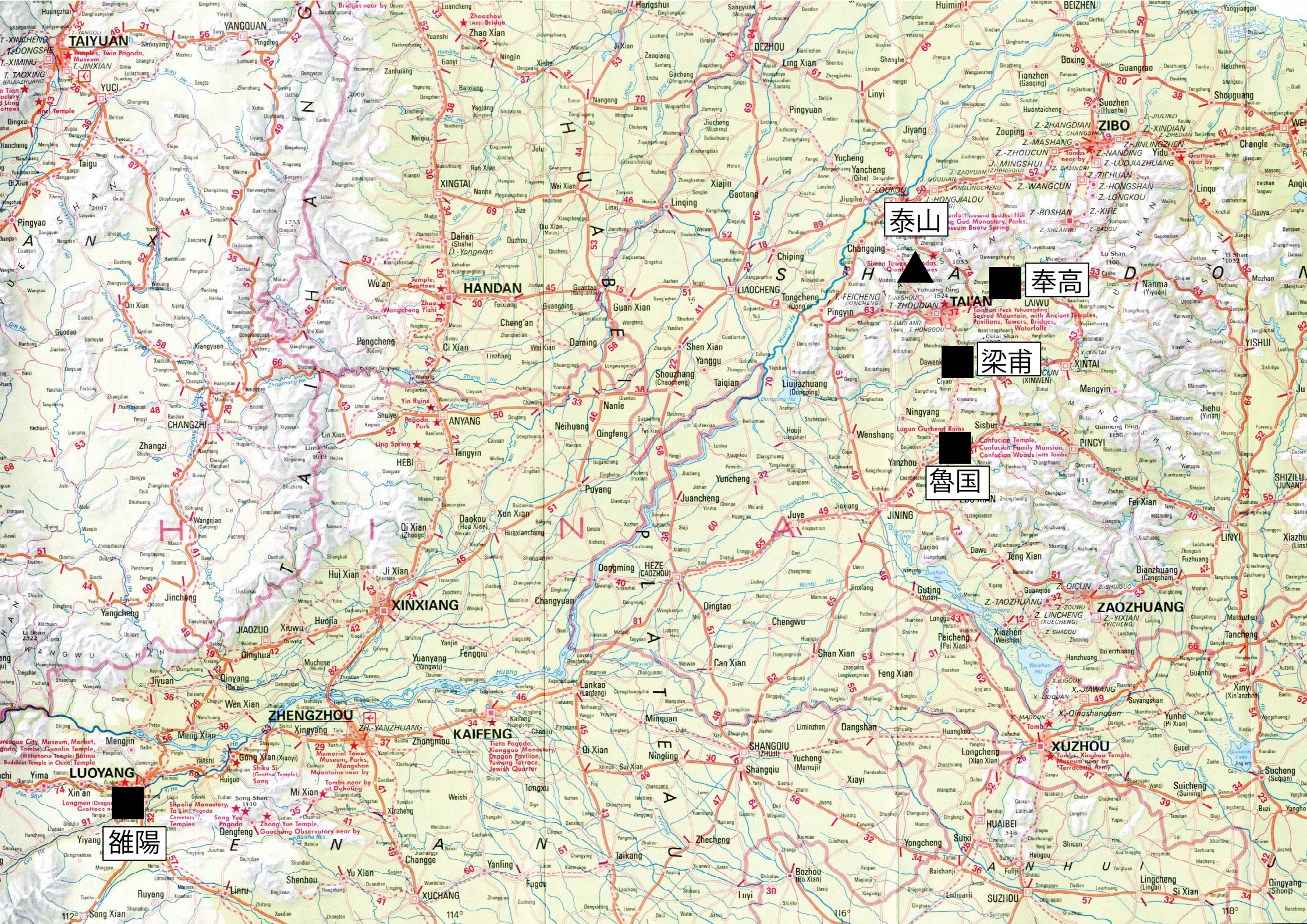
○底本は、中華書局版「続漢書」劉昭注引用とする。

○劉昭注引用は、十二節。長文の第一節は、さらに内容から便宜的に八節に分けた。

○校勘にあたっては、厳可均「全後漢文」、「後漢書集解校勘記（「集解校勘記」）、「中華書局版後漢書校勘記（「中華書局校勘記」）を参照した。

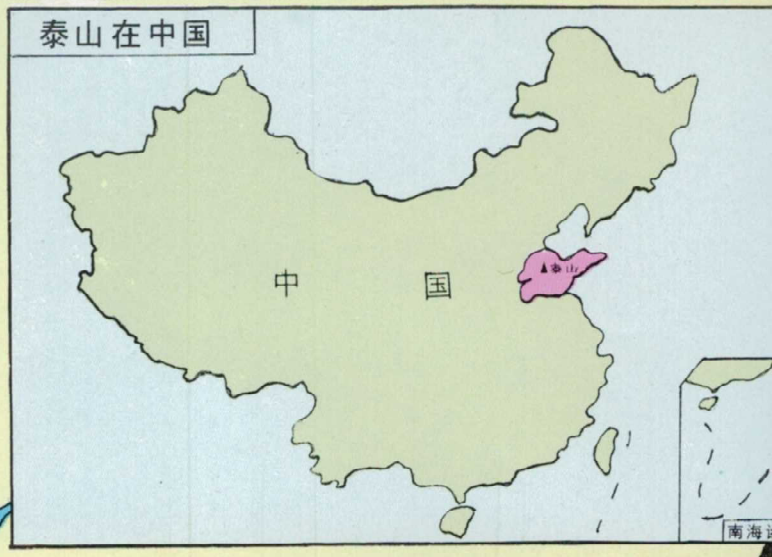
○訳注にあたっては、「後漢書集解」引用諸注並びに倪其心他選注『中国古代游記選』（中国旅遊出版社、一九八五）（「游記選」）を主に参照した。

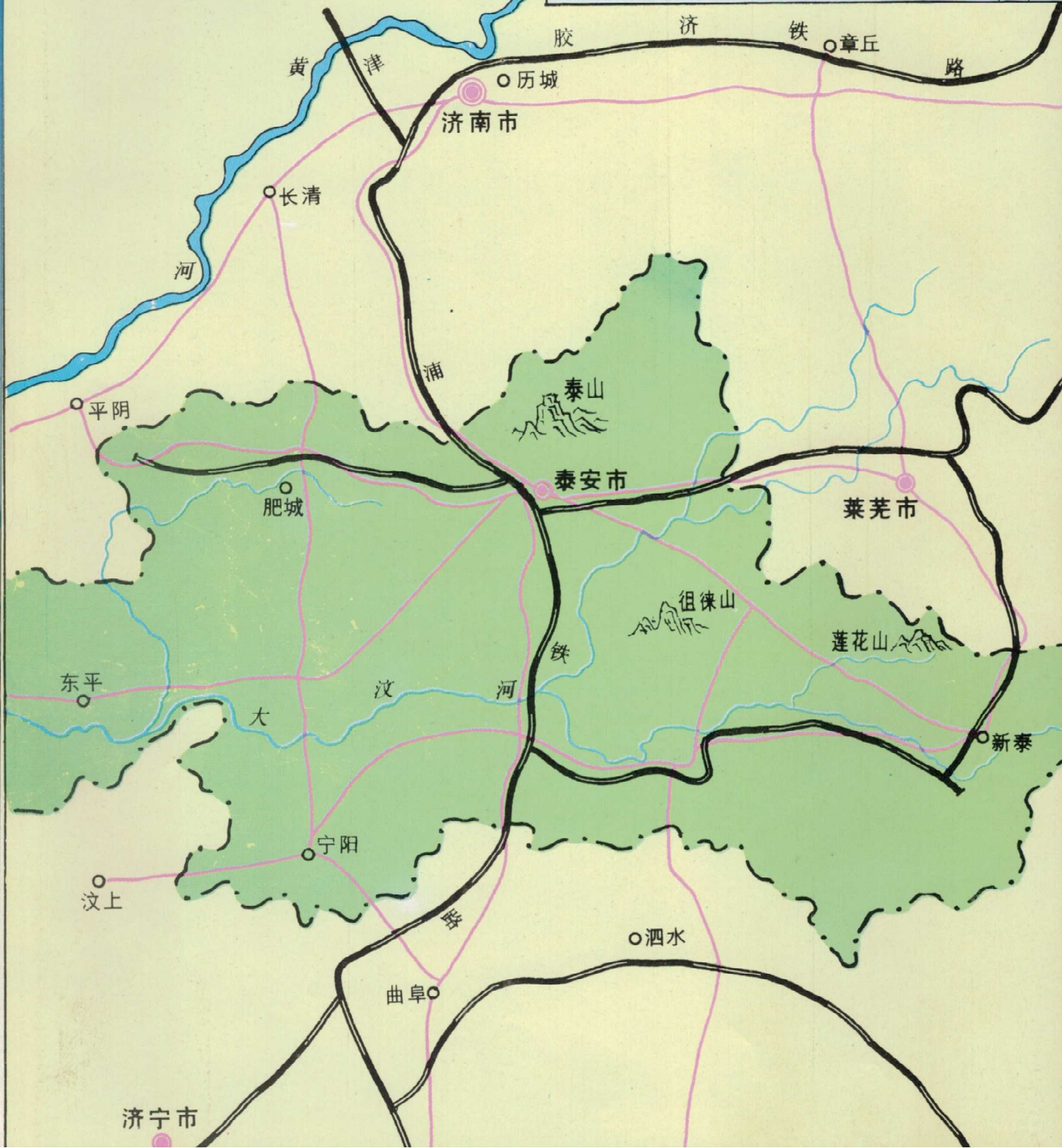

泰山
雒陽


泰山
奉高
梁甫
鲁国
雒陽
TAIYUAN
YANGQUAN
YUCI
Taigu
Pingyao
Qi Xian
Qin Xian
Guodao
Xiangyuan
Wu'an
HANDAN
Cheng'an
Pengcheng
Ci Xian
Linzhang
Wei Xian
Daming
Guan Xian
Guantao
Quzhou
Jize
Dalian (Shahe)
XINGTAI
Nanhe
Ron Xian
Neiqiu
Julu
Zhao Xian
Zhaozhou (Anji) Bridge
Ningjin
Gaoyi
Zanhuang
Baixiang
Yanlong
Yuanshi
Huaisha He
Liuchang
Hengshui
Sangyuan
Ji Xian
Zaoqiang
Gucheng
Nangong
Xinhe
Qinglan
Wangtuan
Qinglan
DEZHOU
Ling Xian
Linyi
Pingyuan
Jiyang
Yucheng
Yancheng (Qihe)
Jiuqihe
Gaotang
Xiajin
Linqing
Linxi
Chiping
Tongcheng (Dong'e)
LIAOCHENG
Pingyin
T.-FEICHENG (XINCHENG)
T.-ZHOUDIAN
T.-DANJING
T.-HONGGOU
Changqing
Simen Tower
Qionglai Bridges
Yuhuang Ding
Taishan (Peak Yuhuangding) Sacred Mountain, with Ancient Temples, Pavilions, Towers, Bridges, Waterfalls
Culai Shan
TAI'AN
LAIWU
Laiwu
Nanma (Yiyuan)
Lu Shan 1108
Yi Shan 1032
Mazhan
Canbu
Lugou
Dawenkou
Ciyao
Nanyi
Huaiyang
Shiqiao
Qingyuan
Yuyuan
Qingzhou
Shiqiao
Huangzhuang
Hanwang
Yuyuan
Jiushan
Yuyuan
Shiqiao
Qingzhou
Qingyuan

泰山地理位置图

泰山位于山东省中部，盘亘泰安市以北；山体总面积 426 平方公里；主峰玉皇顶地理坐标东经 117°06′，北纬 36°16′；海拔高度 1545 米，相对高度 1391 米。





訳注

［1・1］

＊正月二十八日の洛陽出御から、二月十五日の奉高での入斎までを記した、儀注的部分。

■本文

馬第伯封禪儀記曰

　車駕正月二十八日發雒陽宮。二月九日到魯。遣守謁者郭堅伯將徒五百人治泰山道。十日、魯遣宗室諸劉及孔氏瑕丘丁氏上壽受賜。皆詣孔氏宅、賜酒肉。十一日發。十二日宿奉高。是日、遣虎賁郎將先上山、三案、行。還益治道徒千人。十五日、始齋。國家居太守府舍、諸王居府中、諸侯在縣庭中齋。諸卿校尉將軍大夫黄門郎百官及宋公衛公褒城侯東方諸侯雒中小侯、齋城外汶水上、太尉、太常齋山虞。

■訳注

●訓訳

馬第伯封禪儀記に曰く、

　車駕正月二十八日、雒陽宮を發す。二月九日、魯に到る。守謁者郭堅伯を遣りて徒五百人を将いて泰山への道を治めしむ。十日、魯、宗室諸劉及び孔氏瑕丘丁氏を遣りて壽を上らしめ、賜を受く。皆な孔氏の宅に詣り、酒肉を賜はる。十一日、發す。十二日、奉高に宿す。是の日、虎賁郎將を遣りて先に山に上らしめ、三たび案行せしむ。還りて治道の徒千人を益す。十五日、齋を始む。國家は太守の府舍に居り、諸王は府中に居り、諸侯は縣庭の中に居りて齋す。諸卿校尉將軍大夫黄門郎百官及び宋公衛公褒城侯東方諸侯雒中小侯は、城外の汶水の上（ほとり）に齋し、太尉太常は山虞に齋す。

●注

○車駕　天子の乗る車。天子そのもの婉曲的表現。

○魯　当時この地を都としてたのは、光武帝廃太子で、東海王の彊である。

○守謁者　謁者は、本来は天子の出入の随行官。土木建築を担当する将作大匠が省かれた後は、謁者が天子の出入に当たっての道路の整備を担当した。守謁者は不詳。

○郭堅伯　不詳。

○宗室諸劉　後出する諸侯王や列侯であろう。

○孔氏　褒成侯孔志のこと。「後漢書・儒林伝」によれば、王莽は、孔子を尊崇するために、孔子の子孫の孔均を封建して褒成侯とした。王莽が倒れると一旦国は廃せられたが、建武十三年に至り、孔均の子の孔志を再び褒成侯に封じた。以後孔子の子孫は、代々魯の地で孔子廟を守り続けた。後述するが、この度の封禪にあたっても助祭をつとめている。

○瑕丘丁氏　漢代易学の始祖丁寛の子孫にして、漢哀帝の外戚であった丁氏は、王莽台頭後、政界から身を引いて、故郷の瑕丘（山陽郡）に居を構えていた。

○奉高　武帝が泰山封禪にあたって、設けさせた県で、明堂が築かれていた。「封」のために泰山に登る前に、ここで斎を行って身を清め、山中へ入ることのできる「存在」に変換する。

○虎賁郎將　虎賁中郎將のことか。そうであれば、当時は梁松。彼は司空張順とならぶ故

事・儀礼通で、封禅の実施にあたっても、その内容等について中心的な役割を果たした。
○三案行　案行は、調べ歩く、巡察。三案行で、繰り返し巡察する。
○齋　神を祀るにあたり、心身や飲食を慎み、清浄な存在にすること。「続漢書・礼義志」には、斎は、天地の祭りは七日間、とある。この日、十五日から、封禅の挙行の二十二日までは、七日間である。この時具体的にどのような斎をしたのかは不詳。国家機密であっただろう。
○國家　天子のこと。
○太守府舎　泰山郡守の知所は奉高にあった。
○諸王　「続漢書・祭祀志」引く光武帝封禅刻石文には、藩王十二が、皆来て助祭した、とある。先に出た東海王彊をはじめとして光武帝の息子の王は十二名いた。
○諸侯　列侯のことか。だれが随行したかは不詳。
○諸卿校尉將軍大夫黄門郎百官　前掲の封禅刻石文によれば、大尉趙憙・復行司徒事鄧禹などの参加が確認できる。
○宋公衛公　後漢王朝は、殷の末裔を宋公に、周の末裔を衛公にそれぞれ立てて、漢王朝が殷周二代を継承するものと位置づけていた。前掲の封禅刻石文に見える。この時参加したのは宋公孔安と衛公姬武。
○褒成侯　前掲の孔氏孔志。前掲の封禅刻石文に見える。
○東方諸侯　諸侯王は「諸侯」として既出。泰山の近場である東方地域の列侯のことか。
○小侯　列侯のうち、功績が大きな者は県を封邑としたが、功績が小さな者は郷や亭といったより小さな単位を封邑とした。この郷侯・亭侯の類いであろう。
○汶水　泰山を源として東南に流れる。
○太尉　元来は兵事を司ったが、後漢においては祭祀にも加わった。当時は趙憙。
○太常　儀礼祭祀を司る。当時は桓栄。
○山虞　職掌は山林を司る。泰山の宗廟も管轄だった。

●口語訳

馬第伯の「封禅儀記」に言う、

天子の御車は、正月二十八日、雒陽宮を出発した。

二月九日、魯に到った。守謁者郭堅伯を派遣して、五百人の兵隊を率いて泰山へ至る道の整備をさせた。

十日、魯王は、宗室の諸劉及び孔氏、瑕丘丁氏を派遣して天子に長寿のお祝いをさせ、賜りものを拝受した。彼等はみな、孔氏の宅に至り、酒肉を賜わったのである。

十一日、天子一行は、魯を出発した。

十二日、天子一行は、奉高に至り宿泊した。この日、虎賁郎將を派遣して、先に山に上らせ、繰り返し巡察させた。虎賁郎將が戻ってくると、さらに兵隊千人を増援して道の整備に当たらせた。

十五日、斎を始めた。天子は泰山郡守の府舎で、諸王は泰山郡の府中で、諸侯は泰山縣の庭の中でそれぞれ斎を行った。諸卿校尉將軍大夫黄門郎百官及び宋公衛公褒城侯東方諸侯雒中小侯は、郡城外の汶水のほとりで斎し、太尉太常は山虞のところで齋した。

［1・2］～［1・8］

＊封禅に先立って、馬第伯らが先遣隊と登攀したことの記録。泰山登山の体験記的な記述。

［1・2］

＊山麓の遺蹟・遺物などの調査。

■本文

馬第伯自云、某等七十人、先之山虞、觀祭山壇及故明堂宮郎官等郊肆處。入其幕府觀治石。石二枚、狀博平、圓九尺、此壇上石也。其一石武帝時石也。時用五車載[*1]不能上也。因置山下爲屋、號五車石。四維距石、長丈二尺[*2]、廣二尺、厚尺半所、四枚。檢石、長三尺、廣六寸、狀如封筐。長檢十枚。一紀號石、高丈二尺、廣三尺、厚尺二寸、名曰立石。一枚刻文字、紀功德立壇上[*3]。

●校勘

＊1　「芸文類従六」「太平御覧五十二」に倣って補う。

＊2　「通典五十四」に倣って補う。

＊3　「芸文類従六」「太平御覧五十二」に倣って補う。

■訳注

●訓訳

馬第伯自ら云ふ、某（それがし）等七十人、先に山虞に之き、祭山の壇及び故の明堂宮・郎官等の郊肆せし處を觀る。其の幕府に入りて治石を觀る。石は二枚、狀は博平にして、圓九尺、此れ壇上の石なり。其の一石は、武帝の時の石なり。時に五車を用いて載するも上ぐる能はず。因りて山下に置きて屋と爲す。五車石と號す。四維の距石は、長さ丈二尺、廣さ二尺、厚さ尺半所（ばか）り、四枚あり。檢石は、長さ三尺、廣さ六寸、狀は封筐の如し。長檢十枚あり。一は紀號石にして、高さ丈二尺、廣さ三尺、厚さ尺二寸、名づけて立石と曰ふ。一枚、文字を刻して功德を紀し壇上に立つ。

●注

○故明堂宮　前漢武帝封禅時のものだろう。「史記・孝武本紀」に元封二年のこととして、武帝が汶水のほとりに明堂を立てさせたとある。

○郊肆　「儀礼・聘礼」に「問大夫之幣、俟于郊、爲肆」とあり、「鄭玄注」に「肆、猶陳列也」とある。郊外で群臣が儀礼の一貫として並ぶこと。

○幕府　本来は将軍の出征地に設ける宿営。ここでは光武帝のための施設だろう。

○治石　熟語はないが、祭祀のために設けられた石の建造物を指すだろう。

○圓九尺　円形で直径九尺ということか。

○屋　施設の天井部分ということか。

○四維　東南・西南・東北・西北の四方の隅。

○距石　祭壇の周りを囲んで立てられた石の列柱。

○廣　横幅。

○檢石　石で作られた箱状の祭器で封印する。

○封筐　封印された箱。

●口語訳

馬第伯自ら述べる。

私たち七十人は、祭祀に先立って山虞のところに行き、泰山を祭る壇と前漢武帝時代の明堂宮や郎官たちが立ち並んだ場所を視察確認した。仮の陣屋に入り、そこに用意されている石の建造物を観察確認する。石は二枚あり、平べったい形で、円形で直径九尺。これは壇の上部をなす石である。そのうちの一石は、武帝の時代に用いられた石である。当時、五台の車に乗せて山の上にあげようとしたが、あまりの重さであげられなかった。そこで山の麓に置いて、祭壇の上部構造としたのである。五車石と呼ぶ。四隅に設けられた列石は、長さが一丈二尺、横幅が二尺、厚さが一尺半ほどである。四枚ある。文書を封印する石は、長さが三尺、横幅が六寸で、その形は封印された箱のようである。長い石箱が十箇ある。その一つは紀号石で、高さが一丈二尺、横幅が三尺、厚さが一尺二寸で、立石と呼ぶ。その石には、文字を刻み込んでいるが、皇帝の功績と徳行を記してあり、壇の上に立てられている。

［１．３］

＊いよいよ登攀が始まる。先ずは「中観」を経由して「天関」の下へ。

■本文

是朝上山、騎行。往往道峻峭、下[*1]騎、歩牽馬。乍歩乍騎、且相半。至中觀留馬。去平地二十里。南向極望、無不睹。仰望天關、如從谷底仰觀抗峯。其爲高也、如視浮雲、其峻也、石壁窅窱、如無道徑。遙望其人、端端如杆升、或以爲小白石、或以爲氷雪[*2]。久之白者移過樹、乃知是人也。殊不可上。四布僵臥石上。有頃復蘇。亦賴齎酒脯。處處有泉水。目輒爲之明。復勉強相將行、

●校勘

＊１　底本「不」に作る。「通典五十四」に倣って「下」に改める。「後漢書集解」校勘記、中華書局版「後漢書」校勘記も同じ。

＊２　底本「端如行朽兀或爲白石或雲」に作る。文意が通じにくいため「全後漢文」による。

■訳注

●訓訳

是の朝、山に上るに、騎行す。往往道峻峭にして、騎を下り、歩みて馬を牽く。乍(か)つ歩み乍つ騎し、且に相ひ半ばならんとす。中觀に至りて馬を留む。平地を去ること二十里なり。南向望を極め、睹(み)えざるはなし。仰ぎて天關を望むに、谷底より抗峯を仰ぎ觀るが如し。其の高さたるや、浮雲を視るが如く、其の峻たるや、石壁の窅窱として、道徑無きが如し。遙かに其の人を望むに、端端として杆によりて升るが如し。或いは以て小白石となし、或いは以て氷雪となす。之を久しくして白き者の移りて樹を過ぎ、乃ち是れ人たるを知るなり。殊に上るべからず。四布して石上に僵臥す。頃(しばら)く有りて復た蘇す。亦た齎せし酒脯に賴る。處處に泉水有り。目輒ち之がために明なり。復た勉強して相將いて行く。

●注

○中觀　不詳。
○天關　不詳。
○抗　亢に通じる。高い。
○窅窱　奥深いさま。ここでは、石の壁が切り立っている様子を表したもの。清馮桂芬『潘順之吉士、岱頂觀雲氣圖序』に「誓當携手煙蘿、借訪林澗、窮石壁之窅窱、窺天門之窔遼」とある。
○杆　欄干。
○四布　四方に敷き拡げること。ここでは人が四股を拡げるさま。
○僵臥　倒れ伏して起きない。

●口語訳

この朝、山に上るのに、馬に跨がっていく。しかし往往にして道が険しく、騎馬をやめて馬を下り、馬を牽きながら徒歩で歩くこともあった。歩いたり騎乗したりと、半々くらいであった。

中観に至って馬を留めた。ここは平地から二十里である。南を向けば眺望は遮るもの無く目の及ぶ限り遠くまで眺められ、見えないものとてなかった。振り仰いで天関を望むと、まるで谷底から高い峯を仰ぎ見るかのようだった。その高さたるや、まるで浮雲を視ているかのようであり、その険峻さたるや、石壁が険しくそそり立っているかのようで、そこを通る道などはとてもありえないほどだった。

遙かに天関あたりの人々を望んでみると、きちんとならんで欄干によりながら上っているようである。はじめは、それを小さな白い石かと思い、あるいは氷雪かと思っていた。ところがしばらくすると白いものが移動していき樹木を通り過ぎるのが分かり、そこではじめて見えていたものが人間であることがわかったのだ。

ここまでの登攀でとても疲れてしまい、とてもこれ以上、上にあがることができそうにない。体をなげだして岩の上に倒れ伏した。しばらくしてようやく生き返る。また持参した酒や干し肉の力を借りて元気を出す。

あちらこちらに湧き水がある。それらを目にするたびに、美しさや生気を感じ、目が覚めるようだ。そこでふたたびがんばって、互いを励ましあいながら、出発する。

［1・4］

＊天関での記事。

■本文

到天關、自以已至也。問道中人、言尚十餘里。其道旁山脅、大者廣八九尺、狹者五六尺。仰視岩石松樹、鬱鬱蒼蒼、若在雲中。俯視溪谷、碌碌不可見丈尺。遂至天門之下。仰視天門、窔遼如從穴中視天窗矣[*1]。直上七里、賴其羊腸逶迤、名曰環道。往往有絙索、可得而登也。兩從者扶挾、前人相牽。後人見前人履底、前人見後人頂、如畫重累人矣。所謂磨胸捭石、捫天之難也。初上此道行十餘歩一休、稍疲、咽唇焦、五六歩一休、蹀蹀據頓。地不避濕暗。前有燥地、目視而兩腳不隨。

●校勘

＊1　「初学記五」「太平御覧三十九」に倣って補う。

■訳注

●訓訳

天關に到るに、自ら已に至れりと以(おも)ふ。道中の人に問ふに、言ふ、尚ほ十餘里あり、と。其の道旁の山脅は、大なる者は廣さ八九尺、狹き者も五六尺あり。

仰ぎて岩石松樹を視るに、鬱鬱蒼蒼として、雲中に在るが若し。俯して溪谷を視るに、碌碌として丈尺を見るべからず。

遂に天門の下に至る。仰ぎて天門を視るに、窔遼として、穴中より天窗を視るが如し。直ちに上ること七里なるに、其の羊腸逶迤たるに頼りて、名して環道と曰ふ。往往にして絙索有り、得て登るべきなり。兩從者扶挾し、前人相ひ牽く。後人は前人の履底を見、前人は後人の頂を見る。重累の人を畫くが如し。いはゆる磨胸揖石、捫天の難なり。初めて此の道を上るや、行くこと十餘歩にして一休す。稍く疲れ、咽唇焦ぐがごとし。五六歩に一休し、牒牒として據頓す。地は濕暗を避けず。前に燥地有り、目視れども兩腳隨はず。

●注

○山脅　山の脇、谷間。
○碌碌　石の多いさま。
○丈尺　丈尺にあてて物の長さを測る。不可見丈尺で、測ることのできないほど深いこと。
○窔遼　深遠で奥が深いさま。
○天窗　高窓。
○直上七里　直線距離なら七里。
○羊腸逶迤　羊の腸のようにうねうねと曲がっているさま。
○絙　組紐。また絙に同じ。絙なら、大縄。
○兩從者　両脇に従者がついているのであろう。
○扶挾　助け支える。
○前人相牽　前にも従者がいて、引っ張ってくれているのであろう。
○所謂　出典不詳。
○磨胸　（岩壁のような道に）胸を擦りつけるようにしているさま。
○揖石　揖は両手で持ち上げる。ここでは両手を石の壁にかけて体を持ち上げているさま。
○捫天　捫は撫でる。天に届きそうな高所の登攀。
○牒　蹀に通じる。蹀蹀は、歩幅を狭くして歩くさま。よちよち歩き。
○據頓　據は、よりかかる。頓は、とめる、留める。據頓で、足がすくんで歩みが止まるさま。
○地不避以下　言葉の意味は分かるが、文脈が分からない。一応、別紙の通りに訳してみた。

●口語訳

やっと天関に至ったと思ったところ、同道のものから、ここから更に十里あまり先です、と言われた。道の両脇の谷は、大きいものは幅が八九尺で、狭いものでも幅五六尺はある。

振り仰いで岩石に生える松樹を見上げると、鬱蒼と茂っていて、まるで雲の中にいるかのようだ。溪谷を見下ろすと、石がごろごとしており、計り知れないほど深い

遂に天門の下に至った。仰いで天門を視ると、深くて、まるで穴の中から高窓を見ているかのようだ。直線距離では七里なのに、羊の腸のようにうねうねと曲がっているため、環道（めぐり道）と言う。あちらこちらに手すりの綱がしこまれていて、これによって登ることができる。両側から従者が手助けをしてくれ、前にも従者がいて引っ張り上げてくれる。

後ろの人は前のひとの靴底を見ることになり、先を行く人は（振り返れば）後ろの人の頭のてっぺんを見下ろすことになる。まるで、折り重なった人を描いているかのようだ。岩壁で胸をこすり、割れ目に手を入れて体をもちあげるようにして上る。天空を撫でるような高所の難所である。

この道を上り始めたときは、十歩あまり進んでは休憩していたが、次第に疲労がたまり、口やのどは焦げるように乾いてくる。ついには五六歩ごとに休み、よちよち歩きになっては、足がすくんで止まってしまう。本来ならば避けたがる湿潤の場所も、避けることができないで進み、本来であれば行きたいはずの乾燥した場所には、あまりの暑さと乾燥のため、足がすくんで動こうとしない。

［１・５］

＊天関から山頂まで。始皇帝や漢武の古跡がある。

■本文

早食上、晡後到天門。郭使者得銅物。銅物形狀如鍾、又方柄有孔、莫能識也。疑封禪具也。得之者、汝南召陵人、姓楊名通。東上一里餘、得木甲。木甲者、武帝時神也。東北百餘歩、得封所。始皇立石及闕在南方。漢武在其北二十餘歩。得北垂圓臺。高九尺、方圓三丈所。有兩階。人不得從上。從東陛上、臺上有壇。方一丈二尺所。上有方石、四維有距石。四面有闕。鄉壇再拜。謁人多置錢物壇上、亦不掃除。

■訳注

●訓訳

早食に上り、晡後天門に到る。郭使者銅物を得。銅物、形狀は鍾の如く、又た方柄に孔有り。能く識るもの莫きなり。疑ふらくは封禪の具ならん。之を得る者は、汝南召陵の人、姓は楊名は通なり。

東のかた上ること一里餘にして、木甲を得。木甲なる者は、武帝の時の神なり。東北のかた百餘歩にして、封所を得。始皇の立石及び闕南方に在り。漢武は其の北二十餘歩に在り。北垂の圓臺を得。高さ九尺、方圓三丈ばかりなり。兩階有り。人從ひて上るを得ず。東の陛より上る。臺上に壇有り。方一丈二尺ばかり。上に方石有り、四維に距石有り。四面に闕有り。壇に鄉（むか）ひて再拜す。謁人錢物を壇上に置くこと多く、亦た掃除せず。

●注

○早食　朝食。
○晡　申の刻。午後四時前後。
○郭使者　前出の郭堅伯。
○鍾　酒器の一種。

○方柄　鍾の取っ手が四角の棒状なのか。
○得之者　先には「郭使者」が銅物を「得」る、としている。こちらの「得」は「発見」で、郭使者の「得」は「入手」であろう。
○木甲　不詳。木製の鎧を帯びた神か。
○始皇立石　いわゆる泰山刻石。当時は勿論現存した。
○北垂　北辺。
○方圓三丈所　一方（直径）が三丈くらいの円形、と解した。
○人不得從上　封禅の儀式のとき、皇帝以外の人はここから上ってはならない、の意味に解した。
○謁人　拝謁する人。
○錢物　お供え物であろう。
○掃除　祓い清める、あるいは単に清掃する。

●口語訳

朝食後上り始め、午後四時頃に天門に到る。

郭使者が銅製の器物を手に入れた。その形状は、酒器の鍾のようであり、四角い柄の部分には穴が空いている。どういうものか誰も知らなかった。おそらく封禅の祭具なのであろう。これを見つけたのは、汝南召陵出身の楊通という人物である。

東に一里ほど上ると、木甲を得た。木甲とは、武帝の時の神である（その神像を得た）。東北に百歩あまりで、封禅を挙行した場所に出た。始皇帝の泰山刻石と、門闕が南側にある。漢武のときの祭壇はその北二十歩あまりのところ。

北辺に円形の台があった。高さは九尺、直径三丈あまりである。両側に階段がある。儀式の時には、皇帝以外の人は、この階段を上ることができない。

東側の階段から円台に上ってみる。すると台のうえに祭壇があった。一辺一丈二尺ばかりの方形である。台の上には方形の石があり、四隅に列石が列んでいる。四面に門闕がある。

壇に向かって再拝した。拝謁者が銭や物などのお供え物を壇上に置くことが多く、また清掃されておらず古いお供え物が残存している。

［１・６］

＊［１・６］は光武帝が天門に上ってきたときに、壇上が汚れていることを叱責したことを記す。これまで馬第伯が先遣隊として登った時のことを述べてきたものと辻褄が合わない。［１・５］で壇が汚れているのを見たことを述べたので、それに続けて後日談である光武帝の事ヲ挿入したものと推測される。

■本文

國家上見之則詔書所謂酢梨酸棗狼藉散錢處數百幣帛具道是武帝封禪至泰山下未及上百官為先上跪拜置梨棗錢於道以求福即此也[*1]。

●校勘

＊１　この節、意味が通じがたいところが多い。そこで、「游記選」に倣い「全後漢文」

が校補したものを用いる。

國家上見之。則詔書所謂酢梨酸棗狼藉、散錢處數百、幣帛具道。詔問其故。主者曰、是武帝封禪至泰山下、未及上、百官為先上跪拜、置梨棗錢於道、以求福、即此也。上曰、封禪大禮、千載一會、衣冠士大夫、何故爾也。

■**訳注**

●**訓訳**

國家上りて之を見る。則ち詔書に謂ふ所の「酢梨酸棗狼藉し、散錢數百に處り、幣帛道に具す」ものなり。

其の故を詔問するに、主者曰く、「是れ武帝の封禪に泰山の下に至り、未だ上るに及ばずして、百官為めに先に上りて跪拜し、梨棗錢を道に置き、以て福を求む、即ち此れなり」と。

上曰く「封禪の大禮は、千載一會なり。衣冠の士大夫、何の故に爾(しか)る」と。

●**注**

○詔書　壇上の狼藉ぶりを見た光武帝が発した叱責の文書。

○酢梨酸棗　酢・酸は腐ること。

○狼藉　取り散らかしたさま。

○幣帛　神に捧げる礼物の絹布。

○主者曰　彼は武帝期の狼藉が今残っているというが、武帝の封禪から数十年たったときまで、腐敗した果物が残っていたとは考えられない。

●**口語訳**

皇帝陛下が上ってこられて、この場を見られた。そのありさまは、陛下が下された命令書に「腐った梨や杏がそこいらへんに取り散らかっており、ばら銭が辺り一面に散らばっていて、供物の絹が道ばたに放り出されている」と書かれている通りであった。

陛下がこのことについて下問されると、担当者は「これは武帝のとき、封禪のために泰山の麓へ来て、彼自身がまだ上っていない段階で、百官達が先遣隊として登り、梨杏銭をささげて福を求めた、その痕跡なのです」と回答した。

すると陛下はこう言われた「封禪という大礼は、千年に一度というめったにない慶事です。それなのに、皇帝をさしおいて臣下たちが勝手に礼拝するとは何事ですか」と。

［1・7］

＊泰山山頂の諸峯の記述。この節、「全後漢文」等では、誤脱があろうとして、かなり字句を補う。前稿では、それに従ったが、本稿では最小限の補足に留めた。

■**本文**

東山名曰日觀。日觀者、雞一鳴時、見日始欲出、長三丈所。故以名焉[*1]。秦觀者望見長安、吳觀者望見會稽、周觀者望見嵩山[*2]。北有石室。壇以南有玉盤、中有玉龜。山南脅神泉、飲之極清美利人。

●**校勘**

＊1　「水経注・汶水注」に倣い、補う。
＊2　底本「齊西」に作る。「中華校勘記」が、「後漢書集解」引く盧文弨の説によって「嵩山」と改めるのに従う。やや強引ではある。

■訳注
●訓訳
　東の山は名づけて日觀と曰ふ。日觀なる者は、雞一鳴の時、日の始めて出でんと欲すること、長さ三丈ばかりなるを見る。故に以て名づく。
　秦觀なる者は長安を望見し、吳觀なる者は會稽を望見し、周觀なる者は嵩山を望見す。
　北に石室有り。壇以南に玉盤有り、中に玉龜有り。山の南脅に神泉あり。之を飲めば極めて清美にして人に利あり。

●注
○日觀・秦觀・吳觀・周觀　峯の名ととった。秦觀から見えるという長安と、周觀から見えるという嵩山は、方向が同じであるが。

●口語訳
　山頂の東の峯を日觀という。日觀という名は、鶏が暁を告げる第一声の時、太陽が昇り始めて三丈くらいの大きさになったものが見える。そこで（太陽が初めて見るところというので）日觀というのだ。
　秦觀からは遥か長安を望見でき、吳觀からは遥か会稽を望見でき、周觀からは遥か嵩山を望見できる。
　山頂の北部に封禅の儀式に用いた石室がある。祭壇の南には玉盤があり、その中には玉の亀がある。山の南の谷に神泉がある。その水はとても清らかで澄み切っており、飲めば人を生き返らせる。

［1・8］
＊下山の様子。馬第伯の登攀記録はここで終わる。
■本文
日入下去、行數環。日暮時頗雨、不見其道、一人居其前、先知蹈有人、乃舉足隨之。比至天門下、夜人定矣

■訳注
●訓訳
　日入りて下り去り、行くこと數環。日暮の時、頗る雨ふり、其の道を見ず。一人其の前に居り、先ず蹈みて人有るを知るりて、乃ち足を舉げて之に隨ふ。
　天門の下に至る比（ころほ）ひ、夜人定なり。

●注
○人定　深夜人が静かなとき。午後九時前後。

●口語訳

太陽が沈んでから下り始め、何回がぐるぐる回りながら進む。日暮れ頃から雨がとても降り、道が見えなくなった。自分の前に一人おり、その人が踏んでいること（あるいは音）から人が居ることが事前に分かり、そこで初めて自分も足を上げて踏み出して、その人について行く。天門に至るころには、深夜の九時ごろになった。

［2］

＊［2］から再び儀注的記述。［2］は十九日から二十一日の封禪挙行の前日まで。なお、皇帝等は、十五日から斎に入っており、［2］も斎期間中のこととなる。瑞兆を見ている。

■本文

車駕十九日之山虞、國家居亭、百官（布）〔列〕野。此日山上雲氣成宮闕、百官並見之。二十一日夕牲時、白氣廣一丈、東南極望致濃厚。時天清和無雲。瑞命篇「岱獄之瑞、以日為應」也。

■訳注

●訓訳

車駕十九日、山虞に之く。國家は亭に居り、百官は野に布す。

此の日、山上は雲氣宮闕を成し、百官並びに之を見る。

二十一日、夕牲の時、白氣廣さ一丈、東南に望を極め、濃厚を致す。時に天清和にして雲無し。瑞命篇に「岱獄の瑞、日を以て應と爲すなり」と。

●注

○夕牲　祭祀の前日、犠牲を供えるのに必要な器具を点検すること。

○瑞命篇　「礼記」の逸文らしい。「夕方、東南の方角に気体が伸びる」というのが「太陽に関わる瑞兆である」というのは方角が違うように思われる。

●口語訳

天子の御車は、二月十九日に山虞のところへ行かれた。天子は高台におり、百官たちはその前の広場に敷き列んだ。

この日、泰山山上では、雲気が宮殿の形をなし、立ち並んだ百官は皆それを目撃した。

二十一日の夕方、犠牲のための器具を点検する時間に、広さ一丈の白い極めて濃厚な雲気が、東南方向に目の許す限り伸びていった。「瑞命篇」で「泰山における瑞兆は、太陽の反応がそれにあたる」というのはこのことだ。

＊［3］から［12］は、二月二十二日の封禪当日の記録。

［3］

＊左記の「続漢書・祭祀志下」の本文（以下「志本文」）に附された注の文。具体的には「燎祭」の注。

志本文「二十二日辛卯晨、燎祭天於泰山下南方、羣神皆從、用樂如南郊（二十二日辛卯の晨、天を泰山の下の南方に燎祭す。羣神皆な從ふ、樂を用ひ南郊に如く）」。

■本文

晨祭也。日高三丈所、燔燎煙正北向*1。

●校勘

＊1　底本「燔燎燔燎煙正北也」に作る。「中華校勘記」に従い、改める。

■訳注

●訓訳

晨祭なり。日高さ三丈ばかりなり。燔燎するに、煙正北に向く。

●注

○燔燎　霊芝を焚く儀礼。

○正北向　「正に北に向く」とも読める。意味は大差ない。

●口語訳

晨に行う祭祀である。太陽が三丈ばかり昇ったとき。霊芝を焚くと、煙は真北に上っていった。

［4］

＊左記志本文に附された注の文。百官たちの泰山登攀の手段が身分によって異なることを記す。

志本文「諸王、王者後二公、孔子後褒成君、皆助祭位事也（諸王と、王者の後の二公［殷と周の末裔］と孔子の後の褒成君、皆な助祭として位し事とするなり）」。

■本文

百官各以次上。郡儲輦三百、為貴臣諸公王侯、卿大夫百官皆歩上、少用輦。

■訳注

●訓訳

百官各々次を以て上る。郡の儲輦三百は、貴臣諸公王侯の爲なり、卿大夫百官は皆な歩して上り、輦を用ふるは少なし。

●注

○儲　具える。

○輦　人が引っ張る車。

○爲　侯までで区切るのは「中華書局版」による。

●口語訳

百官たちはそれぞれ順々に上っていく。郡が用意した輦に乗るのは、貴臣諸公王侯までで、それ以下の卿大夫百官はみな徒歩で登山し、輦を使う者は少ない。

［5］

＊左記志本文に附された注の文。登る天子の輦の動きを記す。

志本文「至食時、御輦升山（食の時に至り、御輦山に升る）」。

■本文

國家御首輦、人輓升山。至中觀休、須臾復上。

■訳注

●訓訳

國家首輦を御し、人輓きて山に升る。中觀に至りて休むも、須臾にして復た上る。

●口語訳

天子は先頭の輦を率い、人が引っ張って泰山を登る。中観に至って休憩するが、すぐにまた登り始める。

［6］

＊左記志本文に附された注の文。山頂へ到着したのちの百官たちの動きを記す。

志本文「日中後、到山上。更衣（日中するののち、山上へ到る。更衣す）」。

■本文

須臾、羣臣畢就位。

■訳注

●訓訳

須臾にして、羣臣畢く位に就く。

●口語訳

まもなく、群臣たちがすべて位置についた。

［7］

＊左記志本文に附された注の文。群臣が登壇して整列するのに対し、天子が取る行動を記す。

志本文「羣臣以次陳後、西上、畢位升壇（羣臣、次を持って陳するののち、西に上る。畢く位し壇に升る）」。

■本文

國家臺上北面、虎賁陛戟臺下。

■訳注

●訓訳

國家臺上にて北面し、虎賁臺下に陛戟す。

●注

○虎賁　ここでは、既出の虎賁郎将梁松ではなく、武器を持って天子に扈従する護衛兵のことだろう。

○陛戟　戟を手に取って陛下を守ること。

●口語訳

天子は台上で北を向いて立ち、護衛の虎賁たちは戟を手に取って列んで陛下を護衛する。

［8］

＊左記志本文に附された注の文。石箱を開く担当者を記す。

志本文「尚書令奉玉牒檢、皇帝以寸二分璽親封之、訖、太常命人發壇上石（尚書令は玉牒檢を奉じ、皇帝は寸二分の璽を以て親しく之を封ず。訖りて、太常は人に命じて壇上の石を發せしむ）」。

■本文

騶騎三千餘人發壇上方石。

■訳注

●訓訳

騶騎三千餘人、壇上の方石を發す。

●注

○騶騎　騎士。騎馬でここまで登ってきたわけではないだろう。常には騎馬している武官ということだろう。

○三千餘人　石箱を開くのには多すぎるように思われる。また登山してきたのもこれほどの数ではない。文字に誤りがあるか。

○發　開く。

●口語訳

三千人あまりの騎士が、壇上の石箱を開く。

［9］

＊左記志本文に附された注の文。檢石の数や素材などを記す。

志本文「尚書令藏玉牒已、復石覆訖、尚書令以五寸印封石檢（尚書令玉牒を藏し已り、復た石もて覆ひ訖る。尚書令五寸の印を以て石檢を封ず）」。

■本文

以金為繩、以石為[*1]檢。南方北方各二檢[*2]、東方西方各三檢。檢中石泥及壇土色、青[*3]赤白黑、各依如其方色。

●校勘

＊1　底本「三」に作る。中華校勘記に倣い「爲」に改める。

＊2　「全後漢文」に倣い、補う。

＊3　「北堂書鈔」に倣い、補う。

■訳注

●訓訳

金を以て繩を爲り、石を以て檢を爲る。

南方北方各々二檢、東方西方各々三檢なり。

檢中の石泥及び壇土の色は、青赤白黑、各々其の方の色の如きに依る。

●注

○方色　五行の配当では、「東―青、南―赤、西―白、北―黑」である。

●口語訳

黄金でしばる繩を作り、石で箱を作る。

南方北方それぞれ二檢置き、東方西方それぞれ三檢配置する。

檢の中の石泥と壇の土の色は、青赤白黑と、それぞれ四方の方角の色と同じにする。

［10］

＊左記志本文に附された注の文。「封」が終わってからの群臣の万歳の記事。

志本文「事畢、皇帝再拜、羣臣稱萬歲（事畢り、皇帝再拜す。群臣萬歲を稱す）」。

■本文

稱萬歲音、動山谷。有氣屬天、遙望不見山巔、山巔人在氣中、不知也。

■訳注

●訓訳

萬歲と稱するの音、山谷を動かす。氣の天に屬する有り。遙かに望むに山巔を見ず。山巔の人は氣の中に在りて、知らざるなり。

●口語訳

群臣たちが萬歲と唱える声は、山谷を動かすほどであった。

天に立ち上る「雲気」に覆われている。そのため遙かに山頂を望むが何も見えなかった。山巔の人々は「雲気」に覆われていたため、群臣達の萬歲の声が山谷を動かすほどであったことは分からなかった（ようだ）。

［11］

＊左記志本文に附された注の文。下山の様子を詳しく述べる。儀注的部分だが、細かい体験や感情などが主観的に述べられており、登攀記的な記述となっている。

志本文「命人立所刻石碑（この碑文は「続漢書・祭祀志上」に引用）、乃復道下（人に命じて刻せし所の石碑を立てしめ、乃ち道を復して下る）」。

■本文

封畢。有頃、詔百官以次下、國家隨後。數百人維持行、相逢推、百官連延二十餘里。道迫小、深谿高岸數百丈。歩從匍匐邪下[*1]、起近炬火、止亦駱驛。歩從觸擊大石、石聲正讙、但讙石无相應和者。腸不能已、口不能默。夜半後到、百官明旦乃訖。其中老者氣劣不行、正臥巖石下。

明日、太醫令復遵問起居。國家云：『昨上下山、欲行迫前人、欲休則後人所蹈、道峻危險、恐不能度。國家不勞、百官已下露臥水飲、無一人蹉跌、無一人疾病、豈非天邪！』泰山率多暴雨、如今上直下柴祭封登、清晏温和。明日上壽、賜百官省事」。事畢發、暮宿奉高三十里。明日發、至梁甫九十里夕牲

●校勘

＊1　底本「上」に作る。意をもって「下」に改めた。

■訳注

●訓訳

封、畢る。

頃有りて、百官に詔して次を以て下らしめ、國家は後に隨ふ。

數百人、維持して行き、相ひ逢推す。百官の連延たること二十餘里なり。

道は迫小にして、深谿高岸數百丈なり。歩從は匍匐して邪（ななめ）に下る。起ちては炬火に近く、止りては亦た駱驛たり。歩從大石に觸擊すれば、石聲正に讙す。但だ讙石に相ひ應和する者无（な）し。腸は已むこと能わず、口は默すること能わず。

夜半の後に到る。百官は明旦に乃ち訖る。

其の中の老いたる者は、氣劣にして行けず、正に巖石の下に臥す。

明日、太醫令復た遵ひて起居を問ふ。

國家云ふ「昨、山を上下す。行かんと欲すれば前人に迫り、休まんと欲すれば則ち後人に蹈まる。道は峻にして危險にして、恐れ度る能わず。國家勞せず、百官已下露臥水飲するに、一人の蹉跌無く、一人の疾病無きは、豈に天に非ずや。泰山率ね暴雨多きも、如今は上りて直ちに下り、柴祭封登するに、清晏温和なり。明日上壽し、百官に省事を賜はん」と。

事畢りて發し、暮に奉高三十里に宿す。

明日發し、梁甫九十里に至りて夕牲す。

●注

○國家隨後　皇帝がしんがりというのはおかしいだろう。「國家の後に隨ふ」か。

○維持行　維持は、保ち続ける、支える。支え合いながら進む。
○逢推　逢は、迎える。逢推で、前後助け合いながら。
○道迫小　迫が、せばまる、ならば「道は狭まり小さく」。せまる、ならば「道は人でひしめき合って小さく」となる。今後者に従う。
○邪　斜に通じる。
○但讙石旡相應和者　音を立てて落ちていく石に応じるもの、つまりその石がどこか底に到達して止まることがない、ということか。
○旡　無に通じる。
○駱驛　途絶えることなく続くこと。
○腸不能已　下山の疲労と恐怖で、はらわたがちぎれそうだというのか。
○口不能默　下山の疲労と恐怖であれば、むしろ言葉を出すこともできない、となるのではないか。あるいは、恐怖のあまり思わず声が出てしまう、か。
○明日、太醫令……　封の翌日、二十三日。
○太醫令　少府の属官で、諸医を職掌とした。
○起居　天子の起き伏し、全ての行動。また機嫌。医薬関係者が、天子の身の回りに注意をし、起居中的文献の作成に携わっていた。
○國家云　ここに下山の苦労が述べられている。天子は輦に載っており、徒歩で下山したわけではない。徒歩で下山したもののことを代弁しているのか。
○蹉跌　つまづく。つまづいて怪我をすることか。
○清晏温和　天が澄み渡り晴れており、気候がおだやか。
○賜百官省事　「中華書局版」は、「豈非天邪」までを天子の言葉と取る。それに遵って「明日」を重ねていくと、梁甫での禅の祭が二十六日となり、続漢書本文と符合しない。そこで「明日上壽」を天子の言葉と解し、天子の言葉を本稿のようにした。省事は、事務業務を簡素化すること。祭祀を無事に終えた褒美として、官吏の事務業務を簡素としてもよい、という恩恵を与えたのであろう。
○奉高三十里　泰山から三十里の奉高の地、と解した。
○明日發　二十四日。二十五日に、梁甫で禅の儀式を執り行っている。
○梁甫九十里　奉高から九十里の梁甫の地、と解した。

●口語訳

泰山山頂における封の儀式が終了した。

その後しばらくして、百官に命令が下り、順々に下山することとなり、天子は最後尾となった。

数百人が、支え合いながら、助け合いながら進む。百官達の列は延々と二十里あまりとなった。

道は狭く人がひしめき合い、傍らの深い谿や険しいがけは数百丈もの高さである。徒歩で進む者は、はいつくばるようにして斜めに下っていく。立ち上がって進もうとすると、前の人が掲げる松明に接しそうになり、そうかといって立ち止まれば延々と列が詰まってしまう。歩いていて足下や傍らの大きな石に触れると、それがガラガラと大きな音を立てて落下していく。その音を立てて落ちる石がどこかに到達する様子もなく、どこまでも落ちてゆく。疲労と恐怖で、はらわたはねじれるように痛み、黙することもできず思わず声

を出してしまう。
夜半過ぎてから麓に到着した。百官全てが下山したのは翌朝の明け方だった。
随行者の中で年老いたものは、気が衰えてしまい、進むこともできず、岩の下にうつ伏せに倒れ込んでしまった。
封の翌日、太医令が天子に遵ってご機嫌を伺った。
天子が言われた、
「昨日は泰山を登り降った。こみあった道行きで、進もうとすると前を行く人に迫り、休もうとすれば後ろの人に踏まれてしまう。道は険峻で危険、恐怖は計り知れないほどだった。それでも、天子は大して疲労することもなく、百官以下すべてのものが、野宿で水しか飲めないようなこともあったが、一人のつまづく（or 脱落する）もの無く、誰一人病気にならなかったのは、まさに天祐だと言えよう。泰山はおおむね暴雨が多いのだが、今回は登ってそのまま下山したり、事前の柴祭や登っての「封」の祭祀の間中、ずっと天は澄み渡り晴れており、気候も穏やかであった。明日、群臣から天子の長寿のお祝いを奉る儀礼を終えたら、百官に事務の簡素化という褒美を与えよう」と。
事務が全て終了し、一同は出発する。暮に三十里の距離の奉高に到着し宿した。
明日、奉高を出発し、九十里の距離の梁甫に至り、「禪」の祭祀のための夕牲を行った。

［12］
＊左記志本文に附された注の文。「封」「禪」両方を無事になしとげたまとめを述べる。
志本文「二十五日甲午、禪、祭地于梁陰、以高后配、山川羣神從、如元始中北郊故事（二十五日甲午、禪す。地を梁陰に祭る、高后を以て配し、山川の羣神從ふこと、元始中北郊の故事の如くす）」。

■本文
功效如彼、天應如此、羣臣上壽、國家不聽。

■訳注
●訓訳
功效彼の如くなれば、天の應ずること此の如し。羣臣壽を上するも、國家聽さず。

●注
○功效　堅固細密。

●口語訳
祭祀を執り行うことが堅固細密であったので、天がこのように応じたのである。
群臣が天子の長寿のお祝いを奉ったが、皇帝はそれを遠慮辞退された。

山川游記としての「封禪儀記」

清末の大儒兪樾は、竹添井井の「桟雲峽雨日記」に寄せた序において「文章家排日紀行、

始于東漢馬第伯封禅儀記」と述べ、馬第伯の「封禅儀記」を、中国文学の一ジャンルをなしている日記体紀行文の劈頭を飾るものとの認識を示している。そこで、登攀体験的な部分の口語訳をここに掲げる。

二月十五日か、先遣隊としての登攀記録

［１・２］山麓の様子

馬第伯自ら述べる。

私たち七十人は、祭祀に先立って山虞のところに行き、泰山を祭る壇と前漢武帝時代の明堂宮や郎官たちが立ち並んだ場所を視察確認した。仮の陣屋に入り、そこに用意されている石の建造物を観察確認する。石は二枚あり、平べったい形で、円形で直径九尺。これは壇の上部をなす石である。そのうちの一石は、武帝の時代に用いられた石である。当時、五台の車に乗せて山の上にあげようとしたが、あまりの重さであげられなかった。そこで山の麓に置いて、祭壇の上部構造としたのである。五車石と呼ぶ。四隅に設けられた列石は、長さが一丈二尺、横幅が二尺、厚さが一尺半ほどである。四枚ある。文書を封印する石は、長さが三尺、横幅が六寸で、その形は封印された箱のようである。長い石箱が十箇ある。その一つは紀号石で、高さが一丈二尺、横幅が三尺、厚さが一尺二寸で、立石と呼ぶ。その石には、文字を刻み込んでいるが、皇帝の功績と徳行を記してあり、壇の上に立てられている。

［１・３］中観を経て天関へ

この朝、山に上るのに、馬に跨がっていく。しかし往往にして道が険しく、騎馬をやめて馬を下り、馬を牽きながら徒歩で歩くこともあった。歩いたり騎乗したりと、半々くらいであった。

中観に至って馬を留めた。ここは平地から二十里である。南を向けば眺望は遮るもの無く目の及ぶ限り遠くまで眺められ、見えないものとてなかった。振り仰いで天関を望むと、まるで谷底から高い峯を仰ぎ見るかのようだった。その高さたるや、まるで浮雲を視ているかのようであり、その険峻さたるや、石壁が険しくそそり立っているかのようで、そこを通る道などはとてもありえないほどだった。

遙かに天関あたりの人々を望んでみると、きちんとならんで欄干によりながら上っているようである。はじめは、それを小さな白い石かと思い、あるいは氷雪かと思っていた。ところがしばらくすると白いものが移動していき樹木を通り過ぎるのが分かり、そこではじめて見えていたものが人間であることがわかったのだ。

ここまでの登攀でとても疲れてしまい、とてもこれ以上、上にあがることができそうにない。体をなげだして岩の上に倒れ伏した。しばらくしてようやく生き返る。また持参した酒や干し肉の力を借りて元気を出す。

あちらこちらに湧き水がある。それらを目にするたびに、美しさや生気を感じ、目が覚めるようだ。そこでふたたびがんばって、互いを励ましあいながら、出発する。

［１・４］天関にて

やっと天関に至ったと思ったところ、同道のものから、ここから更に十里あまり先です、と言われた。道の両脇の谷は、大きいものは幅が八九尺で、狭いものでも幅五六尺はある。

振り仰いで岩石に生える松樹を見上げると、鬱蒼と茂っていて、まるで雲の中にいるかのようだ。溪谷を見下ろすと、石がごろごとしており、計り知れないほど深い

遂に天門の下に至った。仰いで天門を視ると、深くて、まるで穴の中から高窓を見ているかのようだ。直線距離では七里なのに、羊の腸のようにうねうねと曲がっているため、環道（めぐり道）と言う。あちらこちらに手すりの綱がしこまれていて、これによって登ることができる。両側から従者が手助けをしてくれ、前にも従者がいて引っ張り上げてくれる。

後ろの人は前のひとの靴底を見ることになり、先を行く人は（振り返れば）後ろの人の頭のてっぺんを見下ろすことになる。まるで、折り重なった人を描いているかのようだ。岩壁で胸をこすり、割れ目に手を入れて体をもちあげるようにして上る。天空を撫でるような高所の難所である。

この道を上り始めたときは、十歩あまり進んでは休憩していたが、次第に疲労がたまり、口やのどは焦げるように乾いてくる。ついには五六歩ごとに休み、よちよち歩きになっては、足がすくんで止まってしまう。本来ならば避けたがる湿潤の場所も、避けることができないで進み、本来であれば行きたいはずの乾燥した場所には、あまりの暑さと乾燥のため、足がすくんで動こうとしない。

［１・５］天関から山頂まで

朝食後上り始め、午後四時頃に天門に到る。

郭使者が銅製の器物を手に入れた。その形状は、酒器の鍾のようであり、四角い柄の部分には穴が空いている。どういうものか誰も知らなかった。おそらく封禅の祭具なのであろう。これを見つけたのは、汝南召陵出身の楊通という人物である。

東に一里ほど上ると、木甲を得た。木甲とは、武帝の時の神である（その神像を得た）。東北に百歩あまりで、封禅を挙行した場所に出た。始皇帝の泰山刻石と、門闕が南側にある。漢武のときの祭壇はその北二十歩あまりのところ。

北辺に円形の台があった。高さは九尺、直径三丈あまりである。両側に階段がある。儀式の時には、皇帝以外の人は、この階段を上ることができない。

東側の階段から円台に上ってみる。すると台のうえに祭壇があった。一辺一丈二尺ばかりの方形である。台の上には方形の石があり、四隅に列石が列んでいる。四面に門闕がある。

壇に向かって再拝した。拝謁者が銭や物などのお供え物を壇上に置くことが多く、また清掃されておらず古いお供え物が残存している。

［１・７］山頂の諸峯

山頂の東の峯を日観という。日観という名は、鶏が暁を告げる第一声の時、太陽が昇り始めて三丈くらいの大きさになったものが見える。そこで（太陽が初めて見るところというので）日観というのだ。

秦観からは遥か長安を望見でき、呉観からは遥か会稽を望見でき、周観からは遥か嵩山を望見できる。

山頂の北部に封禅の儀式に用いた石室がある。祭壇の南には玉盤があり、その中には玉の亀がある。山の南の谷に神泉がある。その水はとても清らかで澄み切っており、飲めば

人を生き返らせる。

［1・8］下山

太陽が沈んでから下り始め、何回がぐるぐる回りながら進む。日暮れ頃から雨がとても降り、道が見えなくなった。自分の前に一人おり、その人が踏んでいること（あるいは音）から人が居ることが事前に分かり、そこで初めて自分も足を上げて踏み出して、その人について行く。天門に至るころには、深夜の九時ごろになった。

二月二十二日「封」当日の記録

［11］下山のさま

泰山山頂における封の儀式が終了した。

その後しばらくして、百官に命令が下り、順々に下山することとなり、天子は最後尾となった。

数百人が、支え合いながら、助け合いながら進む。百官達の列は延々と二十里あまりとなった。

道は狭く人がひしめき合い、傍らの深い谿や険しいがけは数百丈もの高さである。徒歩で進む者は、はいつくばるようにして斜めに下っていく。立ち上がって進もうとすると、前の人が掲げる松明に接しそうになり、そうかといって立ち止まれば延々と列が詰まってしまう。歩いていて足下や傍らの大きな石に触れると、それがガラガラと大きな音を立てて落下していく。その音を立てて落ちる石がどこかに到達する様子もなく、どこまでも落ちてゆく。疲労と恐怖で、はらわたはねじれるように痛み、黙することもできず思わず声を出してしまう。

夜半過ぎてから麓に到着した。百官全てが下山したのは翌朝の明け方だった。

随行者の中で年老いたものは、気が衰えてしまい、進むこともできず、岩の下にうつ伏せに倒れ込んでしまった。

封の翌日、太医令が天子に遵ってご機嫌を伺った。

天子が言われた、

「昨日は泰山を登り降った。こみあった道行きで、進もうとすると前を行く人に迫り、休もうとすれば後ろの人に踏まれてしまう。道は険峻で危険、恐怖は計り知れないほどだった。それでも、天子は大して疲労することもなく、百官以下すべてのものが、野宿で水しか飲めないようなこともあったが、一人のつまづく（or脱落する）もの無く、誰一人病気にならなかったのは、まさに天祐だと言えよう。泰山はおおむね暴雨が多いのだが、今回は登ってそのまま下山したり、事前の柴祭や登っての「封」の祭祀の間中、ずっと天は澄み渡り晴れており、気候も穏やかであった。明日、群臣から天子の長寿のお祝いを奉る儀礼を終えたら、百官に事務の簡素化という褒美を与えよう」と。

事務が全て終了し、一同は出発する。暮に三十里の距離の奉高に到着し宿した。

翌日、奉高を出発し、九十里の距離の梁甫に至り、「禅」の祭祀のための夕牲を行った。

ここでは泰山登攀の様子が具体的かつ生々しく描かれている。単純な比喩が多く、文学的な雕琢を経ているとは言いがたい稚拙な文章であるが、馬第伯の感情や感動が率直かつ素朴に語られており、生き生きとした表現となっている。漢代文学の中心であった、典故

と修辞を多用した華麗な「賦」とはほど遠く、先行する「楚辞」などに見られる山川の神秘化もなければ、後出する六朝文学における山川の美の賞賛もない。山川に己を投影させるという象徴化もなく、泰山は、ただただ登攀の対象としてのみ語られている。

実際には、こうした記録的な記述は、「封禅儀記」以外にもある程度書かれていたのかもしれない。しかし、漢代においては、こうした文章は文学としては扱われなかったことから埋もれてしまったのであろう。「封禅儀記」は、儀礼的記事でもあることから、たまたま残されたのではないか。

（終）

（加筆訳注：薄井俊二、二〇二三年五月三十日）

＊訓訳と詳細な注を、拙稿「馬第伯「封禅儀記」訳注稿」（森田明編『中国水利史研究会創立三十周年記念　中国水利史の研究』国書刊行会、一九九五）に掲載。